

[Original Paper]

## Study of the difference between male and female caregivers in home care

Fumie Ishibashi

Aino Gakuin College

### Abstract

We studied the actual condition of male caregivers, as compared with female caregivers, using Doll Location Test and interviews. The results showed that (1) female caregivers had a highly intimate relationship with both patients and family members, (2) male caregivers seemed less intimate with family members than with patients, (3) male caregivers ask advice and request supports of care managers less than female caregivers. This study suggests that male caregivers are lonely in the family of patients and therefore professional care managers should pay special attention to support them.

**Key words** : home care, caregiver, personal perception, intimate, Doll Location Test

## 在宅看護における家族介護者の対人認知に関する研究

—— 男性介護者の対人認知の実態 ——

石 橋 文 枝\*

**【要 旨】** 本研究の目的は、在宅介護における男性介護者の介護の実態に焦点をあて、男性介護者と被介護者、家族員との対人認知構造について明らかにすることである。調査は、①Doll Location Test と、②介護者の介護に対する取り組みについてインタビューによって行った。その結果、男性介護者と女性介護者の間には、被介護者、家族員に対する親密性には有意差が認められた。すなわち、①女性の介護者の場合、被介護者、家族員いずれに対しても親密性は高い、②男性介護者の場合、被介護者に対するよりも家族員に対する親密性が低い、③男性介護者の専門職者に介護に対する相談事や支援を求める行動は少ない。すなわち、男性介護者は女性介護者とは異った介護に対する認識や行動を持ち、その介護の実態は孤独であるように思われる。これらの結果から、専門職者は個々の男性介護者の特性を知った上で積極的に男性介護者を支援する必要性が示唆された。

キーワード：在宅介護、男性介護者、対人認知、親密性、Doll Location Test

### はじめに

わが国における在宅介護の特徴は家族や親族によって担われていること、および介護における女性の占める割合が高いことである。このことは介護を担う人は「妻」が31.6%、「長男の妻」が27.6%、「実娘」が15.5%、「夫」が5.0%、「長男」が4.4%であるとする報告からも明らかである（高橋重郷，2001）。介護において妻の占める割合が高い事実は、男女間の寿命の差という側面と家族内における性別役割分業が要因と考えられる。森岡清美ら（2000）は、わが国の家族形態は小家族化や個人化に伴う家族機能の弱化、社会規範の変化とともに性別役割分業も揺らいできていると述べている。このような家族形態の変化や性別役割分業の変化は、今後、男性による介護を増加させる要因になると考えられるが、男性の場合、定年後に介護者

になる場合が多い。筆者が行った介護に関する調査では、介護者の介護負担に関する研究と比べ、介護者の性差に関する検討はほとんど行われておらず、とくに男性介護者に焦点をあてた研究は少ない（馬庭恭子，1996；奥山則子，1997）。男性介護者の場合、日常的な家事の体験や介護に必要な知識や体験に乏しく、女性の介護者とは異なった認識や行動を起すと考えられる。

本研究は、在宅介護における家族支援調査を実施した介護者の対人関係の調査から、男性介護者の介護の実態に焦点をあてることを目的とした。男性介護者が介護を行う際の、被介護者、家族員への対人認知特性について調査し、介護者の性や性別分業の差異が対人認知にどのような影響を及ぼしているかについて検討した。

\* 藍野学院短期大学

## I. 用語の定義

- (1) 家族：本研究において「家族」とは、現代社会で表現される核家族を意味しており、夫婦とその子供からなる世帯として用いた。
- (2) 家族員：本研究において用いる家族員とは、親の介護を行う際に、未婚の子供だけにとらわれず、介護の手助けのできる、独立別居している子供等も含め家族員としてみている。従って、本論文では、介護者の家族員に対する親密性は、夫婦だけの世帯であっても、別居している子等の介護協力の有無についても調査を行い、介護に協力できる子供等の全てを家族員とした。

## II. 研究方法

### 1) 対象

T市にある2つの訪問看護ステーションの管理者、および訪問看護を利用している介護者に研究の目的を説明し、承諾を得た介護者45名を本研究の対象とした。介護者45人の性別は、男性介護者15名（続柄は、実父2名、息子3名、夫10名）で、年齢区分は、50代1名、60代6名、70代5名、80代3名であった。女性介護者は30名（続柄は、実母4名、娘10名、妻11名、嫁5名）で、年齢区分は40代10名、50代7名、60代9名、70代1名、80代3名であった。

### 2) 調査道具

DLT (Doll Location Test) 標準セット1組を用いた。DLTは自分と自分を取り巻く人間関係を、それぞれを象徴するミニチュアの人形（シンボル）で表現させる事を目的としている。八田（2002）によれば、今までの他のシンボル配置技法による研究からは、人形間の距離は、被験者の人間関係の知覚を反映し、表現される状況の特殊性を反映することが明らかにされている。一般には親密な関係の場合には人形間の距離は近いものとして表現されるが、ストレスや葛藤があると人形間の距離が離れる。親密さに焦点を当てた研究はおむね妥当な結果を生じている。DLTの研究結果も、人形間の距離の近さは親密な関係を、距離の遠さは人間関係の疎遠さを表現している。人間関係をベクトルとみなせば、計量心理学的にデータ解析が可能である（八田武志，2002）。

### 3) 調査方法

筆者が介護者の自宅を訪問し、介護者と対面式で調査を行った。DLTを行う場合、検査者が介護者を表象する人形を提示して、「これはあなたです」と説明しながら盤上に置かれた検査用紙の中央に、介護者と同じ方向をむけて人形を配置した。検査手順は、介護者に介護を行う上で協力してくれる家族員及び同居家族者について確認した後、「家族と自分との関係を盤上に表現して下さい。人形は自分の置きたいところに自由に置いて下さい」と指示した（図1, 2）。人形の配置終了後、介護者の介護に対する考え方、被介護者と家族員との関係、介護サービスの満足度、介護不安・今後の生活に対する期待などについてインタビューを行った。所要時間は30分～2時間30分位であった。

本研究では、配置された人形間の距離（mm）について分析した。人形間の距離を相対的にみて、介護者との距離が近い状態に配置された人物に対しては親密性が高く、介護を行うにあたり身近におきたい存在であり、一方、距離が離れたものを親密性の低い、介護

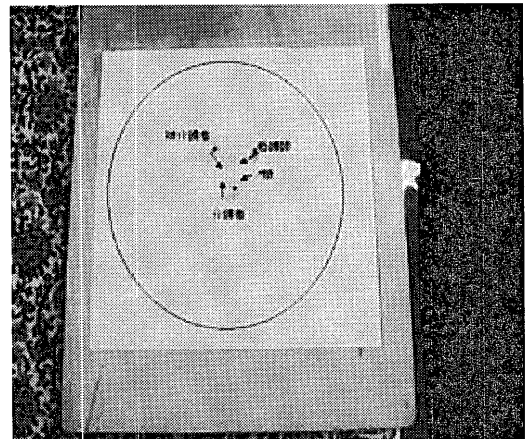


図1 DLT 検査用紙の配置図



図2 DLT の実施風景

に期待の低い存在とみなして検討を行った。

### Ⅲ. 結 果

#### 1) 男性介護者の被介護者、家族員に対する親密性 (表1)

介護者 (n=45) の被介護者、家族員に対する親密性について、以下の結果が得られた。①家族員よりも、被介護者の方を自分の近くに配置する傾向 (t=1.722, df=82, P<.089) がみられた (表1-a)。②介護者を性別でみた場合、男性介護者も女性介護者も、ともに被介護者、家族員との親密性には差を認めなかった (表1-b, c)。③また、被介護者と家族員との親密性の比較をみると、被介護者に対する親密性は女性介護者に高い傾向 (t=2.007, df=17.9, P<.060) がみられた。④家族員に対する親密性でも、女性介護者が男性介護者よりも有意に親密性が高いことが分かった (t=3.046, df=25, P<.05) (表1-d)。

#### 2) 介護に対する考え方と対人関係 (表2)

男性介護者が介護者を引き受ける背景には、①家族の同居、別世帯を含め、家族構成員の問題、②配偶者が倒れたのが、男性が仕事を退職する時期の前後の出来事で、介護できるのは自分だけである、などの現実的な状況からであった。介護を振りかえり男性介護者は女性介護者に比べて、①被介護者や家族員への不満の言動はほとんどなかった、②介護を継続する上で、介護者自身の健康に対する不安が強かった、③そのため介護者の体力と介護量や介護内容に対し、できないことは無理をせずに専門の人に任せるなど、介護サービスを効率的・効果的に利用していた、④介護負担を緩和するための住宅改修や福祉用具に対する知識や関心は高かった。

介護者等の家族関係は、未婚の子との同居や実弟との同居の場合の他は、夫婦世帯であった。近隣に住む子(娘)が時々家事の援助をしてくれるケースもあったが、家族員が主体的に介護を支援してくれる場合には、介護者と子等との交流はあるが、それ以外は介護者と家族員との家族関係は希薄であった。また、男性介護者の場合、女性介護者とは異なり、被介護者と散歩や買い物で外出の機会する外は、外部との交流は乏しかった。

### Ⅳ. 考 察

#### 1) 男性介護者の被介護者に対する親密性

男性介護者の60%は、高齢者の夫が妻の介護をしている。残りの40%は、息子が両親を介護する、あるいは高齢の父親が子供を介護するケースであった (表2)。高齢の男性介護者の場合、夫婦のみの世帯であり、子供等は別世帯をもっていた。子供等(とくに娘)は、親の面倒はみたいが、同居をする事は困難であるため、週に1回~2回の訪問を行ない、男性介護者には困難な家事や被介護者の精神面での支援をするなどの介護支援行動を行っていた。

本調査結果では、女性介護者の方が男性介護者よりも、被介護者に対し親密性が高い傾向がみられた。女性介護者は、家族役割として子育てや家事などを日常的な役割として行ってきた体験があるため、介護をすることに対して、不安よりも役割意識が高く、頑張りすぎる傾向があるといわれる (馬庭恭子, 1996)。この事実も親密性を高める要因になっているものと考えられる。男性介護者の場合、妻に介護が必要になった事実を受けとめると、男性の能力で可能な介護と、そうでない事に対して客観的に判断して行動する傾向にある。家事や妻の身体面の介護に関しては専門職に任

表1 介護者(性差)と被介護者、家族員との親密性の比較

項 目	平均値 (標準偏差)	
	介護者の対人認知距離 (mm)	
a) 被介護者、家族員との親密性 (n=44)	被介護者	33.9 (17.2) †
	家族員	41.0 (21.2) †
b) 男性介護者の被介護者と家族員との親密性 (n=15)	被介護者	42.0 (23.1) n.s.
	家族員	54.1 (21.3) †
c) 女性介護者の被介護者と家族員との親密性	被介護者 n=30	29.8 (11.8) n.s.
	家族員 n=29	33.5 (17.8) †
d) 介護者の性別からみた被介護者と家族員との親密性の比較	<被介護者> 男性介護者 n=15	42.0 (23.1) †*
	女性介護者 n=30	29.3 (11.9) †
	<家族員> 男性介護者 n=15	54.1 (21.3) †*
	女性介護者 n=29	34.4 (18.2) †

† 検定, n.s. not significant, †P<.1 \*P<.05

表2 介護に対する男性介護者の言動

	介護者		被介護者の状態			世帯構成	インタビュー内容
	年齢(代)	続柄	年齢(代)	続柄	疾患名(介護度)		
1	80	夫	70	妻	糖尿病 脊髄小脳変性症 (5)	夫婦世帯 子供2人 (独立別居)	妻がやる気をもってくれるとよい。移動時の介助と見守りを行う。入退院をしながら在宅生活の維持。 長女が近隣にいて手伝いをしてくれる。 娘がいるので安心できる。経済的に不安はない。ヘルパーを最大限活用(家事)
2	70	夫	80	妻	高血圧症 腹部大動脈瘤 (要支援)	夫婦世帯 養女1人 (独立別居)	一介護者自身も下半身不随の状態— 自分で出来る事は自分で行い妻の力はあまり借りないように努力している。 家事はヘルパーを活用する。娘は当てにならない。
3	80	夫	70	妻	心不全 (2)	夫婦世帯 子供3人 (独立別居)	2人で散歩できるようになりうれしい。 家事は分担し夫婦2人で協力する。娘が2時間かけて家事の手伝いにくる。子供達の世話には出来るだけにならないように最後まで自宅で暮らしたい。ヘルパーの利用はしたくない。
4	50	長男	80	両親	老人性痴呆 (2・3)	両親と次男同居 長男別居	3回/週 訪問し家族の生活状態をみる。 同居は、仕事上困難なので現状の生活を続けるつもり。今の仕事も介護の負担がこれ以上になるとやめなければならない。病気の性質上、事故が起きないかが心配。弟(アルコール中毒)がしっかりとしてくれているといけれども期待できないが、家事は弟が調理師なのでまかせている。
5	60	夫	60	妻	脳卒中後遺症 左片麻痺 (3)	夫婦世帯 長男 長女夫婦 孫 (同居世帯)	一介護者も癌のため通院中— 自分の体調が良くないので、以前のように積極的に世話が出来ない。妻が言う事をきいてくれなくなった。同居の娘の力を借りるが、娘の生活があるからあまり期待をしない。 妻の話し相手や食事の世話をする。
6	60	長男	80	母親	胃癌 (5)	母親 夫婦同居 長男別居	店が忙しいが、介護も精一杯やっている。母親が今より良い状態になる事を期待している。妻が手伝ってくれるので感謝している。
7	50	夫	50	妻	脳卒中後遺症 (5)	夫婦世帯 子供2人 (独立別居)	退院後、トイレ移動と介助に苦勞をした。妻の言葉や手足の機能が少しでも良くなって欲しい。サービス業者の人も、本人のニーズをもっと知ってほしい。子供等とは連絡をとらない。
8	60	父	30	長男	クロイツフェルト・ヤコブ病 (5)	父親 長男 次男同居	介護時の身体援助を行うときに負担を感じる。介護だけは、専門の人に手伝ってもらわないといけない。サービスの量に制約があるので、もう少し量が増えるといけれどもしかたがない。休日に次男が介護を手伝ってくれる。家事といっても、掃除や洗濯で量も少ないから出来る。
9	60	夫	80	妻	老人性痴呆 (3)	夫婦世帯 知的障害を持つ弟と同居 子供2人別居	介護者の体調も良くないために、長男の住む町へ転居したばかり。全てがなれないため、元のところへ戻りたい……。 子供等は、心配してくれるけども、本当はあまり世話になりたくない。妻は出来れば施設にいるほうが良いのだが。
10	80	夫	70	妻	アルツハイマー型痴呆 (3)	夫婦世帯 子供2人 (独立別居)	一介護者は難聴と下肢の痛みで介護が少し負担一介護したいけれども体力がなくなってきた。自分の物忘れが強くなってきている事が不安。長女が2回/週手伝いにくるので助かる。日中はヘルパーの利用。
11	70	夫	60	妻	肝疾患 (自立)	夫婦 末娘と同居	妻は介護をさほど必要としない。 家事は娘がしてくれているので助かる。 妻が今の状態を維持できるように見守る事である。看護婦さんに健康相談にのってもらっている。
12	70	夫	60	妻	脊椎症 下半身麻痺 (5)	夫婦世帯 子供2人 (独立別居)	介護について退院時に丁寧に説明してもらい良かった。妻が外に出るのを嫌がったが、徐々に勧めて今は散歩を楽しみにしている。生活をしやすいように住宅改修を研究して行った。自分の健康も大切なので注意を払っている。子供達はたまに電話で声をきかせてくれたり、顔を見せてくれる。
13	60	父	30	長男	交通事故による頭部挫傷 植物状態 (5)	夫婦 長男 次男 (独身別居)	長男が突然の事故で寝たきりとなり、離婚した。そのため介護をする事になったが、銭湯を急に閉めたり、高度の医療を必要とする介護に困惑。サービスの利用に限界があり、夫婦だけでこの先どうなるのか先の見通しがつかない。次男は自分のことをしっかりとやってくれたら介護を手伝って欲しいとは言えない。妻も一所懸命に介護している。
14	60	夫	50	妻	脳卒中後遺症 (3)	夫婦 末娘と同居 長女・次女 (独立別居)	妻の試験外泊で、住宅改修をしないと生活できない事がわかり、退院前に自宅改修をしたので、介護の負荷も少なくてきていると思う。突然の外出が必要な場合、妻を一人にする事が出来ない事や日常の慣れない買い物に困る。
15	60	長男	80	母親	老人性痴呆 (5)	母親(独居) 長男他兄弟 (独立別居)	毎日、生活を見に伺う。引き取ってみることは、家庭の事情で困難。長男だから自分が母親を見る。他の兄弟は遠くにいるので今のスタイルで生活をする。

せて対処し、介護効率を高めるために積極的に住宅改修を行い、被介護者の身体機能の回復を望む姿勢を男性介護者は持っている。また、男性介護者の場合、インタビューでは、被介護者を施設や病院に入れるよりも自宅で介護したい気持が強く、そのために介護者自身の健康に対する意識が強かった。「施設に入れると妻の状態は今よりも悪くなると思うので、自分が元気であることによって妻が家で生活できる」と話し、妻の健康が今よりも良い状態になることを望み、それを期待して介護に取り組む姿勢であった。イギリスで行われた在宅介護に関する訪問調査（Clare Ungerson, 1987, 平岡訳, 1999）によると、男性介護者は、「妻を介護するのは当然である。二人は結婚したときからどのような環境にあってもお互いを尊重し助け合うことを誓い合っており、いまでも妻を愛している」と男性介護者がインタビューに答えている。宗教観や文化の違いから表現の方法は異なるが、わが国においても、同じように長年連れ添った妻への労わりや感謝の気持が被介護者への親密性に繋がっていると考えられた。

## 2) 男性介護者の家族成員に対する親密性

男性介護者の家族員に対する低い親密性には、性別役割分業の歴史が影響していると考えられる。男性は家族の経済的側面や生活の安全や安定を護る役割をもち、それが男性の特性と考えている。介護行為をする場合においても、家族に弱音を吐くことや家族員に依存することは、男らしさ（父親役割）に反すると考える傾向がある。そのため、家族員に対して介護支援を求める行動が抑制される可能性があると思われる。また、子供等から介護協力を得ることは、子供等の生活に負担をかけるのではないかという配慮から、家族員に介護協力を依頼し難いと考えられる傾向があると考えられる。女性の場合、家族との情緒的な繋がりが男性の場合より強く、子供のときから成人するまで、日常的な母子間の会話や親密性は父子関係よりも高いため、子供等に相談したり援助を求めることは容易と考えられる。男性の場合は、急に介護をしなければならない事情が出来た場合でも、家族員との関係を考慮し、父親から子供等に相談を持ちかけることに抵抗があり、また日常の親子関係の希薄さなどから、女性介護者とは異なった家族員との関係があると考えられる。

インタビューの中で、家族員の介護に対する協力や介護への期待に関する質問に対し、男性介護者は、福祉の問題や介護保険に対する不満を述べることはあっても、感情的に被介護者や家族への不満や不足を表現

する者はいなかった。筆者の訪問看護の体験から、女性介護者は被介護者に対する援助の希望、自らの介護負担に対する相談、家族内の相談等を家族員だけでなく専門職にも相談する傾向があった。しかし、男性介護者は被介護者の介護に関して家族員に相談することも少なく、専門職に対しても、相談というより事後報告という行動をとる傾向があった。男性介護者の場合、自分の考える介護方法で介護を行い、気分転換や介護を共有できる家族員の協力を積極的には望まない孤独な姿がみられた。

今回の調査では男性介護者は、被介護者である妻に対して、夫として愛情をもった介護を行っている事が分かった。しかし、男性介護者の場合、その60%は高齢の夫婦のみの世帯であり、独立して別世帯を持つ家族員との関係は希薄であり、女性介護者の介護行動との間に差異がみられた。また、男性介護者は被介護者に対し、積極的に介護をおこなっているが、介護を行う上で生じた悩みごとや相談を打ち明ける場の少ない事も分かった。以上の実情から男性介護者に対しては、個々の特性を知った上で男性介護者が共通して抱える問題を含め、看護職者側の積極的な援助の必要性があると考えられる。

## 謝 辞

本研究にあたって、調査の目的を理解し協力して下さいました訪問看護ステーションの管理者及びスタッフの皆様へ感謝致します。さらに調査の為に貴重な時間と日々の介護に対する考えについて具体的にお話下さいました介護者の皆様へ心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- Ungerson, C. (1987) Sex gender and informal care. (平岡公一・平岡佐智子訳, 1999), ジェンダーと家族介護, 光生館.
- 八田武志 (2001) シンボル配置技法の理論と実際, ナカニシヤ出版.
- 馬庭恭子 (1996) 在宅ケアと看護職の役割 男性介護者の現状と今後のあり方. 保健の科学 38 : 538 ~ 541.
- 森岡清美・望月嵩 (2000) 新しい家族社会学. 培風館.
- 高橋重郷 編 (2001) 高齢者白書. 全国社会福祉協議会, pp. 54 ~ 61.
- 奥山則子 (1997) 性別役割からみた高齢男性介護者の介護. 地域保健 28 : 62 ~ 74.